

クダンの誕生

——話のイコノロジー・序説——

佐藤 健二

-
- | | |
|---------------------|-------------------------|
| 1 素材と問題意識 | 4 文字・文書・印刷物の媒介——《書かれたもの |
| 2 ハナシ研究の戦略——世間話の重要性 | の作用 |
| 3 クダン記述の特質——表象の分析 | 5 口承のなかの文字——結びに代えて |
-

論文要旨

素材はクダンという半人半獣の怪物のうわさである。クダンを論ずるためには、柳田国男の世間話／昔話概念を再構築し、ハナシの場のありようを問う必要がある。その作業は説話の社会史ばかりではなく、説話研究の社会史の自覚化を要請し、聴き手論—読者論という領域の重要性に光をあてる。そのなかで口承や伝承という概念が、再検討されざるをえなくなる。とりわけ《書かれたもの》との関係が問い直される。クダンの形象は、声の文化と文字の文化との狭間に誕生した。そして今日の民俗学の方法論の固定化や記述の衰弱に対し、大きな問題提起をしている。

クダンの話の構成要素である、命名呼称、文字表記、半人半獣の絵図、予言する能力、災難よけの呪い、仍而如件というフレーズをとりあげ、そのもっとも核の部分に「件」の文字があることを論じた。「件」という文字の絵解きとして、クダンの図像イメージが成立している。クダンの話の誕生をめぐる、三つの異なる水準において《書かれたもの》との関係が指摘できる。第一はかわらばんの図や文字とのかかわりにおいて、第二は声の文化そのものに入り込んだ文字の意識において、そして第三はクダンという音便がもつ意味において、である。つまり口承の現場そのものに、紙—文字メディアが入りこんでいることを、このクダンは物語る。さらに声の文化における「よって件のごとし」のフレーズが、話の骨格をつくっていることを明らかにした。それはまた、証文の文句でもある。他の形をもつ予言する怪物との関係や、絵図を書き写したり張ったり見たりする効果と見世物の言説、また白澤との図像的な近接をたどり、クダンという図像イメージの誕生を論じている。